小児における
死と悪性疾患（白血病・癌）に対する意識
（分担研究：Death Education に関する研究）

宮 本 信 也

要約：小学５・６年生を対象として、死と悪性疾患（白血病・癌）に関する意識調査を行った。調査は、独自に作成した調査用紙を用い、集団記入式で行った。子どもたちは、人間と動物に対して異なる死の意識を有しており、動物に対してより即物的な死のイメージを持っていた。人の死は、外から暴力的に襲ってくるものとして受けとめられていた。白血病の病名は、小学５年生ではその半数しか知っていなかったが、知っている場合には、癌に近い難治のイメージを漠然と持っていた。

見出し語：　死、白血病、意識、小児

いわゆる悪性疾患は、死との関係を強く意識させるため、その疾患を持つ患児に疾患をどのように説明するかということは、大きな問題となることが少なくない。その場逃れの説明をしたり、何も説明しないことは、時として、かえって患児達の不安を増大させることになるであろう。このことは、特に、年長児達にはあてはまることと思われる。

一方では、患児達に疾患の説明を行うとするとき、何をどこまで説明するかということが問題となってくる。何もかもあからさまに言うことがよいとは限らないことは、容易に想像がつくことである。患児達が理解できることばで、理解できるような内容を話すことが必要であろう。そのためには、通常の小児が持つ死や悪性疾患に対する意識を知ることは、同じ年代の患児達に疾患説明を行う上で、大いに参考になるものと思われる。

〔目的〕

以上のような認識のもとに行われる本研究の目的は、日本の小児における死や悪性疾患に対する意識を明らかにすることである。日本の幼児期から思春期までの子ども達を対象として、各年代の死と悪性疾患の意識の特徴を明らかにすることが最終目的である。今年度は、予備調査的意味も含め、小学校高学年生の死と悪性疾患に対する意識を検討する。

筑波大学心身障害学系

〔対象と方法〕

対象は、栃木県O市の小学5年生141 名、6年生127 名（男児142 名、女児126 名）である。調査は、McIntireらの調査項目の一部を参考にして独自に作成した選択肢方式の調査用紙を用いて行った。

〔結果と考察〕

人が死ぬ理由として最初に頭に浮かぶものをあげてもらったのが表1である。回答には5年生、6年生で大きな違いは認められていない。両者合わせると「病気」が一番にあげられており、「病気」というものが、死と結びついて意識されていることがうかがわれる。また、病気、事故、殺人、戦争で全体の60%以上を占めることから、死を外部から襲ってくる暴力的なものとして受けとめていることが推測された。

表1 人が死ぬ理由に関する意識（%）

	計	5年	6年
病気	26.5	24.1	29.1
寿命	25.7	26.2	25.2
事故	25.7	27.7	23.6
殺人・戦争	12.7	10.6	14.9
神の意思・罰	4.5	4.9	3.9
自殺	2.2	3.5	0.8
その他	1.1	0.0	2.4
分からない	1.5	2.8	0.0

表2 死後のイメージ （%）

	人に関して			動物に関して		
	計	5年	6年	計	5年	6年
霊	33.2	40.4	25.2	20.5	22.0	18.9
何かの形	16.8	14.2	19.7	17.9	18.4	17.3
灰	14.9	17.0	12.6	3.7	5.7	1.6
腐敗	14.2	6.4	22.8	30.2	23.4	37.8
その他	5.2	5.0	5.5	4.1	2.8	5.5
分からない	15.7	17.0	14.2	22.0	25.5	18.1

※何かの形：何かの形で体が残る（ミイラなど）

表2は、死んだ後どうなると思うかを、人と動物に関してそれぞれ尋ねたものである。死後のイメージは、人と動物で大きく異なっており、動物に対してより即物的な回答が多い傾向を認めた。灰という回答が人に対して多かったのは、我が国で火葬が多いことの反映と思われた。飼っていた動物の死亡経験の有無で死後のイメージをみると動物の死亡経験のある群（189 名）で、「何かの形が残る」としたものの割合が、人に対して20.1%、動物に対しては8.9 %で、有意な差を認めた（$P<0.05$, $\chi 2=5.04$）。この群では、動物に対して「灰」、「腐敗」の回答が多く、死んだ動物の処理経験が影響していることが考えられた。なお、学年差では、6年生の方で人に対する即物的なイメージの回答が有意に多い結果であった（$p<0.01$, $\chi 2=19.88$, DF=5）。

表3・4は、死後の生まれ変わりに関する意識を尋ねたものである。生まれ変わりを信じるかどうかについては、人・動物どちらに対しても、また、学年間でも差は認められていない。

一方、生まれ変わりがあると回答した生徒に、

生まれ変わる場合、生前と同じか違う生物かと尋ねたところ、人では同じ生物、動物では違う生物とする回答が有意に多かった($P<0.01$, $\chi 2=20.32$, $DF=2$)。また、この回答では、5年生と6年生の間で、有意な違いが認められていた。生まれ変わりを信じている数には学年差がないことから、このことは、生まれ変わりに関する意識には、同じような肯定的意見であっても、学年ー年齢によってかなり異なる意識があることを示すものと思われた。

表3　生まれ変わりの意識ー1　(%)

	人に関して			動物に関して		
	計	5年	6年	計	5年	6年
あると思う	56.0	58.2	53.5	53.0	56.0	49.6
ないと思う	22.4	22.7	22.0	23.9	23.4	24.4
分からない	21.6	19.1	24.5	23.1	20.6	26.0

表4　生まれ変わりの意識ー2　(%)

	人に関して			動物に関して		
	計	5年	6年	計	5年	6年
同じ生物に	40.7	39.0	42.6	19.7	24.1	14.3
違う生物に	44.0	51.2	35.3	69.7	72.2	66.7
分からない	15.3	9.8	22.1	10.6	3.8	19.0

表5　人の霊に関する意識　(%)

	霊の存在			霊の認知能力		
	計	5年	6年	計	5年	6年
あると思う	69.8	78.0	60.6	57.2	60.9	51.9
ないと思う	9.7	7.8	11.8	17.6	17.3	18.2
分からない	20.5	14.2	27.6	25.1	21.8	29.9

表5は、人の霊に関する意識への回答である。霊の認知能力とは、霊は考えることができると思うかという設問への回答である。約70%が霊の存在を信じており、60%が、霊は生きている人間のように考えることができると思っていた。5年生の方で、その傾向が強く認められている。ちなみに、動物に対しても、約60%が、死んだ動物は死後にも生きている人達の世界を感じられると答えていた。

表6　(%)
白血病の病名を知っているか

	計	5年	6年
はい	66.4	51.8	82.7
いいえ	33.6	48.2	17.3

白血病の病名を知っているかどうかを尋ねたのが表6である。5年生では知っているものは半数だが、6年生になると80%以上のものが知っていた。病名を見聞きした媒体は、テレビが最も多く36%で、次いで、両親、学校

の先生、本や雑誌の順であった。マンガ本をあげたものは5％であった。

病名を知っていると答えた生徒に、体のどこの病気かを尋ねたところ、血液の病気と回答したのは82.6％であった。約20％は、骨・肝臓・神経などの誤った項目を選択しており、病名のみを知っているものと思われた。

表7は、白血病で治る人はどれくらいいると思うかを尋ねたものである。半数強で、治りにくいという意識を持っていることが分かる。6年生の方が、難治の意識を持っているものが多かった（P<0.05, χ2=11.29, DF=4）。この回答については、何となくそう思うとしたものが52％、テレビを情報源としてあげたものが15％であった。

表7　白血病はどのくらい治る？（％）

	計	5年	6年
みんな治る	3.4	5.5	1.9
治る人が多い	20.2	27.4	15.2
治る人は少ない	56.7	49.3	61.9
みんな治らない	7.3	11.0	4.8
分からない	12.4	6.8	16.2

表8　子どもの白血病は治りやすい？（％）

	計	5年	6年
知っている	25.8	24.7	26.7
知らない	74.2	75.3	73.3

表8は、「子どもの白血病は大人より治りやすいことを知っているか」という設問への回答である。約1/4が知っていると答えており、その情報源としてはやはり、テレビ(32％）と両親(26％）をあげるものが多かった。

表7と8の結果は、小学校高学年ですでに、漠然とではあるにせよ、白血病に対して難治のイメージが形成されていることをうかがわせるものと思われた。子ども達の意識形成に影響を与えているものの中で大きなものとしては、テレビと両親を媒介とした情報が考えられた。最近、医学的話題をテーマとしたマンガが散見されるようになってきているが、マンガを情報源としてあげたものは4％前後と少なかった。そうしたマンガの多くは、内容的には青年期を対象としていることから小学生では、まだ読む機会が少ないのかもしれない。

表9は、白血病は他の人にうつると思うかどうかを尋ねたものである。10％台とわずかではあるが、うつると思うと答えたものがみられた。しかし、70％前後は正しく認識しており、小学生ということを考えれば、比較的よい認識程度と言えると思われる。

表9　白血病は他の人にうつる？（％）

	計	5年	6年
そう思う	14.6	19.2	11.4
そう思わない	68.0	74.0	63.8
分からない	17.4	6.8	24.8

表10は、表9同様に知識的なものを尋ねたもので、白血病が親から子どもに伝わると思うかどう

かの設問に対する回答である。感染に関する知識に比べ、30%前後とより多くのものが誤った認識を持っていることが分かる。遺伝という概念は、小学生には少し難しいとも思われるので、設問の意味がよく理解されていない可能性も考慮するならば、この回答も、小学生としてはそれほど問題にすることではないのかもしれない。

表１０　　（%）
白血病は親から子どもへつたわる?

	計	5年	6年
そう思う	32.0	41.1	25.7
そう思わない	42.2	46.6	39.0
分からない	25.8	12.3	35.2

表11は、癌に関する設問への回答である。白血病に対してと同様、難治のイメージが強いが、癌に対しての方がその傾向がより強く現われている（P<0.01, χ2=42.6 DF=4）。癌に対する意識に学年による差はなかった。この結果より、小学校高学年では、白血病に対して癌に近いイメージを持っているものの、いわゆる“癌”のイメージよりはやや軽く感じられていることがうかがわれた。恐らくは、“癌”という用語に比べ“白血病”ということばが耳慣れないことも関係しているのかもしれない。

表１１　癌はどのくらい治る?（%）

	計	5年	6年
みんな治る	6.5	6.5	6.4
治る人が多い	4.2	2.9	5.6
治る人は少ない	66.5	68.8	64.0
みんな治らない	17.1	16.7	17.6
分からない	5.7	5.1	6.4

〔まとめ〕

1)小学校５・６年生を対象に死と悪性疾患に関する意識調査を行った。

2)死を外部から暴力的に襲ってくるものとして意識していることがうかがわれた。

3)死の意識は、人に対してと動物に対してで異なり、動物に対してより即物的であった。

4)死後の再生を肯定する意見が50%強にみられ、死の要素である「不可逆性」の理解が「一見」乏しいように見受けられた（恐らくは、小児としてのファンタジー的思考、願望的要素の影響もあるものと思われるが）。

5)白血病という病名は、小学５年生では知っているものは50%であった。

6)病名を知っている場合には、白血病のイメージは癌のそれに近いものであるが、癌よりはやや軽い印象を持っていることがうかがわれた。

7)悪性疾患に対する情報を、子ども達は、主にテレビか両親の話を通じて得ていることが推察された。

8)一般に、５年生に比し６年生では、死の概念、疾患の概念ともに、より正確で客観的になっていく傾向が認められた。

今回の検討は、小学校高学年生のみを対象としているため、上記のまとめは仮のものである。今後、対象学年幅を広げ検討していく予定である。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:小学５・６年生を対象として、死と悪性疾患(白血病・癌)に関する意識調査を行った。調査は、独自に作成した調査用紙を用い、集団記入式で行った。子どもたちは、人間と動物に対して異なる死の意識を有しており、動物に対してより即物的な死のイメージを持っていた。人の死は、外から暴力的に襲ってくるものとして受けとめられていた。白血病の病名は、小学５年生ではその半数しか知っていなかったが、知っている場合には、癌に近い難治のイメージを漠然と持っていた。